

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | 『ヴァリャギ招致伝説』とその背景  |
| Author(s)     | 国本, 哲男  |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 16 p.113-p.132   |
| Issue Date    | 1966-03-25  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80259">https://hdl.handle.net/11094/80259</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『ヴァリャギ招致伝説』とその背景

国 本 哲 男

## ЛЕГЕНДА О ПРИЗВАНИИ ВАРЯГОВ И ИСТОРИЧЕСКИЕ ФАКТЫ В НЕЙ

КУНИМОТО Тэцуо

По «Повести временных лет» варяги-русь, призванные словенами, кривичами, чудью и мерей (славянскими и финскими племенами), приехали в Новгород. Во главе варягов стояли три брата Рюрик, Синеус и Трувор. И от этих варягов-руси прозвалась славянская земля Русью.

Уже полвека назад А.А.Шахматов анализировал это известие, сопоставляя его с различными списками летописей, особенно с «Новгородской первой летописью», и восстанавливал старые формы легенды.

Пользуясь исследованиями А.А.Шахматова и советских ученых М.Н.Тихомирова, В.В.Мавродина, Б.А.Рыбакова и др., я попробовал разгадать исторические факты, которые скрываются за легендой.

1. 「政治的・宗教的歴史書」としての『すぎし年月の物語』
2. シャフマトフの復元
3. ノヴゴロド系伝説の原形
4. タチシチェフの復元
5. 伝説の背景

われわれは、『すぎし年月の物語』の編集者のあらゆる学者ぶった才知に対して、歴史的な信憑性を認めない。その才知には、ルシとヴァリャギの同一性を証明しようとする傾向、根強い願望が、あまりにもはっきり見えていいるからである。

シ ャ フ マ ト フ

## 1. 「政治的・宗教的歴史書」としての『すぎし年月の物語』

『すぎし年月の物語』（ロシア原初年代記）の基本的な性格を、木崎良平氏は「宗教」に認めて、つぎのように指摘している。「原初年代記の基本的性格、それは一言にして言えば、ロシア古代に関する『歴史書』というよりは、歴史の実例をもって種々なる宗教的論議をすすめる一種の『宗教書』という点にある。ペチェルスキー修道院の修道僧であったネストルらの年代記者たちは、単なる歴史家としてロシア古代の歴史を書こうとしたのではなく、すべてのことが全知全能の神の意志によるものであることを説き、その神への信仰をすすめるために、『年代記』を書いたと見てよい」<sup>①</sup>。木崎氏は、これを「旧約聖書中の『歴代志』(Chronicle)」に比し、「多くの資料・口碑・伝説から編集されたものであるが、全体としては、こうした宗教的意図をもって貫ぬかれた一つのまとまった作品」<sup>②</sup>として評価している。

このような評価は、「まず第一に聖物に対する信仰があり、そこから『共通の祖国の観念』を生じた」<sup>③</sup> という一節を含む『「ルースカヤ・ゼムリャー」という言葉についての覚え書』（1956年）に、すでにはっきり現われている。氏はつぎのように述べている。『「キエフ年代記」や『イーゴリ軍征譚』にある Russkaya Zemlya という言葉は、『地理的意味』、『政治的意味』と共に、『宗教的意味』をもっていたと考える必要があると思う。否、『年代記者』や『物語作者』にとって、Rus' とは何よりもまず『邪教を信ずる者』に対する概念であり、Russkaya Zemlya とは『キリスト教徒の国』であり、『神に守護される地』である…Russkaya Zemlya という言葉は、ロシアの府主教、すなわちキエフ府主教に属する東方教会のすべての信者の住地を意味しているのではなかろうか…そして一地方的な名称としての、キエフ周辺の地をさす Russkaya Zemlya という言葉も、ロシア教会中の教会、キエフ府主教教会のある地、ロシア・キリスト教徒の母なる地、と解すべきであろう。それ故にこそ、『Rus' の諸侯』のキエフへの愛着も深い」<sup>④</sup>

『すぎし年月の物語』（1113—18年）は修道僧の筆になるものであり、聖書からの引用がはなはだ多く、宗教的要素に富んでいる。『すぎし年月の物語』は、それを完成したものとして静的に

分析するとき、「宗教書」のような形式をとっている。この点に着目して、年代記を縦につらぬく宗教性を論証した木崎氏の業績は、きわめて興味ぶかいものがある。ここで『すぎし年月の物語』が「宗教書」か、それとも「歴史書」か、という問題を検討するまえに、まず『古事記』をとりあげることにする。

『古事記』は、「邦家の経緯，王化の鴻基」（国家行政の根本組織，天皇の指導の基本）として，天武天皇の命によって帝紀（歴代の天皇の即位から崩御にいたる皇室の記録）を記し定め，旧辞（神話や伝説や歌物語を内容としたもの）をしらべて後世に伝えようとしたものである。それは宗教と政治の一体（祭政一致）の立場から，司祭者としての統治者の祖先を民族神中の最高神に結びつけ，政治と宗教を歴史的発展のうえで一本にまとめあげ，アラヒトガミ天皇による公地公民の親政という律令体制を，イデオロギー的に裏づけたものにほかならない。

その最初の「神代」の部分については，いろいろの見方がおこなわれている。たとえば家永三郎氏は，つぎのように指摘している。「『古事記』と『日本書紀』とは，天皇の祖先とされる神神をはじめ歴代の天皇の系譜とその時代のできごとを時間的順序を追って記述した歴史書の体裁をとっている。たしかにこの両書には，忠実な歴史的事実の記録とみなすべき部分もある。しかし，同時にまったくの思想的な創作に出た部分也多ければ，史実を加工し変形した記述も少くないのであり，両書を全体として歴史書とみることはできない」<sup>⑤</sup>。

「歴史書」でなければ，なにであろうか。氏は「記紀神話」について，さらにつぎのように述べている。「『神代』の物語は…明らかに支配階級の政治的意図から出た創作とみなければ，理解できない」，「物語の中に登場する神々は…実際には現実の宗教的信仰とは関係のない，政治的勢力の反映なのであり，『神代』という構想に宗教的発想がとられているとはいうものの，全体としては必ずしも神話とはいえない，政治思想の神話めかした表現にほかならないのであった」<sup>⑥</sup>。

家永氏によれば，記紀の『神代』は，「歴史書」でもなければ「宗教書」でもなく，「政治思想書」であるということになる。これは津田左右吉氏に始まる見解であるが，最近はこれに対する批判がでている。家永氏自身も同じ本のなかで，古代における宗教のもつ意義をつぎのように強調しているのである。「今日でさえそうであるから，まして合理的精神の発達していなかった古代において，宗教が生活のすみずみまでを支配していたことはいうまでもない。およそ古代初期の文化は，文芸にせよ，歌舞音楽にせよ，政治や経済にいたるまで，宗教的行事と関係のないものはほとんどなかったといってもよからう」<sup>⑦</sup>。

そうであるとすれば，「歴史」もまた「宗教的発想がとられる」というだけでなく，「宗教」

を通してしか現われえないはずである。したがって、支配者の手になる「歴史」（当然のことながら、それは政治的である）は、支配者の「宗教」（これもまた政治的である）の形をとるのであり、「邦家の経緯、王化の鴻基」として天皇統治の由来（つまり歴史）を述べた『古事記』は、支配者の「政治的・宗教的歴史書」とならざるをえないのである。

この政治と宗教の一体性を、肥後和男氏はつぎのように説明している。「ところで津田博士はこれらの物語〔神代の記述〕が、政治的に作為されたものであることを理由として、神話という性質のものではないといわれました。しかしこれは大きな見誤りであるようです。というのは古代において政治は宗教と深くつながり、これを判然と区別することはできなかったからです。つまり皇室は決して単なる政治的首長だけではありませんでした。むしろそれは民族宗教の最高司祭であったのです」、「天皇統治の由来を中心として展開した日本の神話は、実に天皇教ともいうべき古い民族信仰の神典でもあったのです」<sup>⑧</sup>。

さらに三品彰英氏は、「神話」としての「歴史」について、つぎのように述べている。「神話人は史的事実を現代人のごとく語り伝えてはくれない…彼らはその経験する諸現象に対して、天然現象はもちろんのこと、われわれが歴史的事実と見る人間の諸行為に対しても、それを可能ならしめる原理に神秘的な力あるいは神格を認め、それに準じて理解し表現するのである。ゆえに人間の行為、とくに語るに足る重要な歴史的事件は、その背後にある神霊の働きとして語られる…彼らには神を語らない歴史はまったく不信の歴史でしかない」<sup>⑨</sup>。

このように、記紀の『神代』は、単なる「政治思想書」ではなく、歴史を政治の立場から宗教の形で述べた「神話」=「歴史」にはかならないのであり、『神代』を構成要素、しかも連続した構成要素として含む『古事記』、『日本書紀』は、全体として「政治的・宗教的歴史書」と定義することができる。

ここで、『すぎし年月の物語』は「歴史書」か、「宗教書」かという問題にたちかえることにする。この『物語』にも「神話」が含まれている。しかしそれは、日本の神話のように、神から統治者へと直結するものではない。『物語』の神話は、「ノアの箱船」から始まり「バベルの塔」に終る、きわめて短いものであり、『旧約聖書』からとられて、木に竹をついだように、『物語』の冒頭にのせられている。日本神話の荘重雄大な構想にくらべて、それはあまりにも貧弱である。そしてまた、『物語』の神話は東スラヴ人の生活から遊離している。神話のこのような性格は、ルシがキリスト教を導入したことを原因としている。

「宗教が生活のすみずみまで支配していた時代」に、統一国家を建設した君主は、その政治的統一を固めるために、自己の権威を宗教的に裏づけることを必要とする。そのさい、君主の権威

が神に由来するとする、いわゆる「王権神授」の思想を含むビザンツのキリスト教は、キエフの大公にとって政治的にきわめて好都合であった。各種族のもつ土着の民族神に超越する、国家宗教としてのキリスト教の唯一神は、これら土着の神々を追放し、各種族の精神的支柱を統一する。かくして民族神中の第一神として祭られていたスラヴのペルンは水に投げこまれ、それにもなつて土着の神話も追放されて、異国のキリスト教の神話に席をゆずるのである。

日本でも、国家成立にあたって同じような情景がみられた。支配階級の宗教として導入された仏教は、民族神に超越する宗教であった。だが、仏教は一神教ではなく、鎮護国家には役立っても王権神授の思想を含んでいない。したがって、仏教は政治的に確立された天皇の権威を宗教的に裏づけるだけの政治性をもっていなかったのである。しかも汎神教的な性格をもつ仏教は、民族神を排除するものではなかったので、ルシと同じような段階で統一国家を成立させた天皇は、追放されなかった民族神中の最高神アマテラスを祖先神とすることによって、その権威を裏づけるをえなかったのである。

ところで、記紀の編集者が民族の神話・伝承を利用して、それを天皇親政のイデオロギーにまとめあげたように、ルシの年代記者＝修道僧にとっても、世俗性の強い古い年代記<sup>9</sup>、および他の記録、伝承を組みあわせて、異教時代をも含む歴史の発展を、大公の権威を裏づけるために、宗教的に（このばあいは民族の宗教・歴史と断絶したキリスト教の立場から）、統一的に敘述することが、重要な課題をなしていた。

したがって、『古事記』と『すぎし年月の物語』が、同じような事情、同じような目的と方法によって編集されたものである以上、前者に見られる特徴を後者にあてはめても、不都合ではないであろう。つまり、記紀が「政治的・宗教的歴史書」と考えられるのと同じ理由で、『すぎし年月の物語』を「政治的・宗教的歴史書」と見なしてさしつかえないのである。両者のちがいは、前者が「天孫降臨」に象徴されるように、統治者の祖先としての民族神の意志の発現を歴史と考えているのに対して、後者が統治者と、さらには民族とも断絶した唯一の絶対神の意志の発現を歴史としてとらえている点から生じてくるのである（以上の点については、『アマテラスとペルン』の題で報告したことがあるので、稿を改めてくわしく論じることにする）。

以上述べてきたように、『古事記』や『すぎし年月の物語』が「政治思想書」であるか、「宗教書」であるか、それとも「歴史書」であるか、といった問題は、あまり意味をもつものではない。これらをともに、歴史を政治の立場から宗教的に敘述した「政治的・宗教的歴史書」として定義することにする。

したがって、こういった「歴史書」から「政治」と「宗教」をふるいわけることによって、そ

こにかくされた「歴史」を回復することが、『すぎし年月の物語』を史料として利用し、ロシアの過去を再現しようとする歴史家の課題となってくる。そして、このような作業をおこなうためにも、まず「政治性」と「宗教性」の特質を明確にしておかなければならないのであり、この点に、『すぎし年月の物語』に含まれたキリスト教の要素を綿密に分析し、それを体系づけた木崎氏の労作のもつ価値が存在している。

木崎氏が「宗教性」の特徴づけをおこなったのに対して、この小論は「政治」にかくされた「歴史」を回復することを目的としている。それは、11世紀以来年代記を編集した修道院が大公の庇護を受けており、時の政治権力と固く結びつき、しかも『すぎし年月の物語』が成立した12世紀初頭には、遊牧民との闘争にあたって、ルシの総力を結集する必要が痛切に感じられており、キエフ大公を中心とするルシの団結は、きわめて政治的な課題をなしていたからである。それだけに『すぎし年月の物語』には「政治」の反映が強く、井上光貞氏のつぎの指摘がぴったりあてはまる。「国家や宗教の支配層に属する公の機関が歴史をまとめるばあい、そこに自分たちの支配体制を歴史的に肯定しようという意図がしばしば一本の筋となって貫ぬかれている。つまり、自分たちが君臨しているのは偶然のことではなく、本来、当然そうあるべきだったのだ、ということをも自他ともに示したい動機がひそんでいるのである。とすれば、どうしても、自分たちに都合の悪いことはタブーとしてなるべく書かないし、実際にはなかったことでも書きたくなるであろう」。<sup>⑩</sup>

以下シャフマトフの年代記復元を手がかりにして、「ヴァリャギ招致伝説」にかくされた背景をさぐることにする。

## 2. シャフマトフの復元

『すぎし年月の物語』に伝えられている「ヴァリャギ招致伝説」が、もともとどのような形のものであったかについては、『「ヴァリャギ招致伝説」のルシ（ノルマン説批判）』（『立命館文学』228号、1934年6月号）ですでに発表したもので、ここには、わたしの試みた復元の結果だけをのせることにする。それは、『すぎし年月の物語』にのせられている形そのもののなかで、本来の部分と、加筆された部分を区別したものである。テキストとしては写本にもっとも忠実な1926年版をつかい、テキストの〔 〕の部分は（ ）に、意味をおぎなうために筆者の加えた個所は〔 〕にいれ、もっとも古い形は太い字で、もっとも新しい加筆は小さな字で示すことにする。

「（そして）〔彼らは〕海のかなたのヴァリャギのもとへ、ルシのもとへおもむいた。というの

は、彼らは「このように」みずからを呼んだが、ヴァリャギであったからである。あるものがスヴォエと呼ばれ、あるものがウルマネ、アングリャネと「呼ばれ」、あるものがグテと「呼ばれている」ように、そのようにこれらもそうである。ルシ、チュジ(と)スロヴェネ、およびクリヴィチがいった。『わが全土は大きく豊かですが、そこには秩序がありません。わたしたちに公として君臨し、治めるためにおいください』。そして3人の兄弟が自分の氏族とともにえらびだされ、(そして)ルシ全部をひきつれて、到着した。長兄リュリクは(ノヴゴロドに住み)、つぎのシネウスはベロオゼロに、3番目のトルヴォルはイズボリスクに「住んだ」。(そして)、これらの(ヴァリャギ)によってルシの国と呼ばれた。ノヴゴロド人、それはヴァリャギの氏族からでたノヴゴロドの人びとである。というのは、以前はスロヴェネであったからである」。

その後、シャフマトフのおこなった『ノヴゴロド古集成』(1050年集成)<sup>⑧</sup>の復元に目を通すことができたので、つぎに「招致伝説」の前後を含めて、それを紹介し、問題点を指摘することにする。

「ルシの国のはじまり。3人の兄弟がいた。1人は名をクィー、つぎはシチュク、3番目はホリフ「といった」。彼らの妹はルイベジ「といった」。クィーは、いまポリチェフ坂のある山に住んでいた。そしてシチュクは、いまシチュコヴィツァと呼ばれているつぎの山に住んでいた。そしてホリフは、彼にちなんでホリヴィツァと呼ばれた3番目の山に「住んでいた」。そして、町をたて、それにクィエフという名をつけた。町のまわりには、森と大きな松林があり、「彼らは」けだものをとっていた。賢明で思慮ぶかい人びとであり、ポリャネと呼ばれており、クィエフでは今日にいたるまで、ポリャネは彼らからでているのである。

これらの兄弟ののち、彼らの氏族がポリャネで公として君臨しはじめた。そしてジェレヴァネとクリヴィチと戦があった。

そのころ、スロヴェネと呼ばれるノヴゴロド人と、クリヴィチとメリャとチュジが、男「1人」につき白リスの毛皮「1枚」を貢税としてヴァリャギに納めていた。そしてそのものたちは、彼らのもとに来たり、スロヴェネとクリヴィチとメリャとチュジに暴力をふるっていた。そして、スロヴェネとクリヴィチとメリャとチュジは、ヴァリャギにむかって立ちあがり、彼らを海のかなたへ追いはらい、自分たちでみずからを治めはじめた。スロヴェネは自分たちの国(ヴォロスチ)をもっており、町をたて、ノヴゴロドと呼び、そして、長老にゴストムィスルをすえた。ところで、クリヴィチは自分たちの、メリャは自分たちの、チュジは自分たちの「国をもっていた」。そして、自分たちがたがいに戦うべく立ちあがり、彼らのあいだには大きな戦と争いがあった。そして、町は町にむかって立ちあがり、彼らには正義がなかった。そして「彼らは」自分たちにいった。『われわれを治め、法にしたがってさばくような公をさがそうではないか』。「彼



らは〕海のかなたのヴァリャギのもとへおもむいていった。『わたしたちの国（ゼムリャー）は大きく豊かですが、そこには秩序がございません。わたしたちに公として君臨し、治めるために、わたしたちのところへおいでください』。

3人の兄弟が自分の氏族とともに選びだされ、多くの従士団をひきつれて、ノヴゴロドに到着した。そして、長兄はノヴゴロドに住みリュリクであり、つぎのものはペロオゼロに〔住み〕シネウスであり、そして3番目はイズボリスクに〔住み〕トルヴォルである。そして、これらのヴァリャギのゆえに、これらの新来者のゆえに、ヴァリャギと呼ばれた。そして、ノヴゴロドの人びとは、今日にいたるまでヴァリャギの氏族からでているのである。そして、彼らのところにはオリグという名の公がおり、賢明で勇敢な人物であった。そして〔彼らは〕いたるところで戦をはじめ、ドネプル河とスモリニスクの町を見いだした。そしてそこからドネプルをくだり、クィエフの山に到着し、クィエフの町をのぞみ、そこでは誰が公として君臨しているかをたずねた。そして〔人びとは〕いった。『2人の兄弟、アスコリドとジルです』。ところでオリグは自分の戦士を船にかくし、少数の従士をつれてウグリ〔山〕の下の岸に上陸し、商人をよそおい、アスコリドとジルに呼びかけた。2人がくだったときに、残りの戦士が船から岸にかけあがり、アスコリドとシルを殺し、山にはこんで2人をほうむった。そしてオレグはクィエフに公として君臨しつつ座した。そして彼のもとにはヴァリャギとスロヴェネの士がおり、そのときからルシと呼ばれた。ところで、オリグは町々をたてはじめ、スロヴェネ、ヴァリャギとクリヴィチとメリャに貢税をさだめ、そしてノヴゴロドからは1年に300グリヴナを平和のために〔さだめた〕。それはいまも納められている』。<sup>⑧</sup>

シャフマトフの1050年集成の復元は、『ノヴゴロド第1年代記新本』に跡をとどめている 1093年集成（キエフ・ペチェルスキー第2集成、原初集成）を基礎にしており、だいたい一致しているが、後者からかなりの部分が脱落しており、また基本的なくいちがいもみられる。そのおもな点はずのとおりである。

1. シャフマトフでは、キエフ建設の話のところで、「今日にいたるまで、ポリャネは彼らからでているのである」という句は、「これらの兄弟ののち」とつづいているが、1093年集成では、そのあいだに「ルシのツァリグラド遠征」の話、「ポリャネのコザルへの貢納（両刃の剣）」の話がはいっている。

2. シャフマトフの「これらの兄弟ののち、彼らの氏族がポリャネで公として君臨しはじめた」の個所は、1093年集成では、「これらの兄弟ののち、2人のヴァリャギが来たり、公と称した。1人は名をアスコリドといい、もう1人はジルといった。そしてキエフで公として君臨し、

ポリャネを治めていた」となっている。つまり、シャフマトフは、アスコリドとジルがヴァリギの出身であることを、のちの挿入としているのである。

3. 1093年集成で、「スロヴェネは自分たちの国（ヴォロスチ）をもっていた」となっているところを、シャフマトフは、「スロヴェネは自分たちの国（ヴォロスチ）をもっており、町をたてて、ノヴゴロドと呼び、そして、長老にゴストムィスルをすえた」としており、リュリク以前にノヴゴロドの長老ゴストムィスルを認めている。

4. 「ヴァリャギ招致伝説」のところで、1093年集成では、「これらのヴァリャギ、これらの新来者からルシと呼ばれ、これらのものからルシの国の名をえている。そして、ノヴゴロドの人びとは今日にいたるまでヴァリャギの氏族からでているのである」となっているのにたいして、シャフマトフは、「これらのヴァリャギのゆえに、これらの新来者のゆえに、ヴァリャギと呼ばれた。そして、ノヴゴロドの人びとは今日にいたるまでヴァリャギの氏族からでているのである」としている。わたしは、「これらの（ヴァリャギ）によってルシの国と呼ばれた」と復元した。それは「ルシ」の語を生かし、отъ を「から」の意にとり、「ヴァリャギから」、つまり「ヴァリャギによって」ルシと呼ばれたと考えたからである。しかも、これがあとからの挿入で、もともとはなかったものと考えたのである。これにたいしてシャフマトフは、отъ を「ゆえに」、「ちなんで」の意にとって生かし、逆にルシをヴァリャギにおきかえ——ノヴゴロド人がノヴゴロドにきたヴァリャギのゆえにヴァリャギと呼ばれるようになった——と考えている。

いずれにしても、シャフマトフもルシとヴァリャギを別のものと考え、これを同一視する『すぎし年月の物語』の作者の見解を、あとから挿入されたものとしているのである。

5. 「招致伝説」のあとで、1093年集成では、「2年のちシネウスとその弟トルヴォルが死に、リュリクが1人で権力を、2人の弟の権力をにぎり、1人で治めはじめた。そして息子を生み、それをイゴリの名で呼んだ。そして、彼イゴリは成長したときに、勇敢で賢明であった。そして、彼にはオレグという名の軍司令官がおり、賢明で勇敢な人物であった」となっている。シャフマトフはそれを、「彼らのところにはオリグという名の公がおり、賢明で勇敢な人物であった」としている。ここにはイゴリをまったく登場させておらず、イゴリがリュリクの幼児で、オレグはその後見者＝軍司令官という1093年編集以後の形を否定している。したがって、キエフ占領もオレグ1人の仕事とされている。

6. 2でのべたように、アスコリドとジルはヴァリャギの出身とはされておらず、またポリャネで君臨していたのはキー兄弟の子孫であった。オレグがキエフに到着した個所で、はじめてシャフマトフは公としてのアスコリドとジルを登場させている。したがって、ヴァリャギでないア

スコリドとジルは、キー兄弟の子孫である、ということになる。

7. 1093年集成では、「そしてイゴリは公として君臨しつつ座した。そして、彼のもとにはヴァリャギの士とスロヴェネがおり、そして、そのときからその他のものはルシと呼ばれた」となっている。ここはわかりにくい個所であるが、シャフマトフはここではじめて「ルシ」の語をだし、「その他のもの」というやっかいな語をはぶき、「彼〔オリグ〕のもとにはヴァリャギとスロヴェネの士がおり、そのときからルシと呼ばれた」としている。つまり——キエフへ到着したヴァリャギとノヴゴロドのスロヴェネが、ルシであるキエフに来てはじめてルシと呼ばれるようになった——ということになる。ここでも、ヴァリャギとルシは別ものである、という線が貫かれている。

以上みてきたように、シャフマトフによって復元された『ノヴゴロド古集成』（1050年集成）は、『すぎし年月の物語』はもちろん、『キエフ・ペチェルスキー第2集成』（原初集成、1093年集成——『ノヴゴロド第1年代記新本』に跡をとどめるもの）にくらべて、より古い、素朴な形を伝えるものであり、そこではノヴゴロド系の伝説とキエフ系の伝説とが、のちの年代記とはちがった形で統合されている。そのうちとくに興味があるのは、つぎの点である。

1. リュリクのまえに、ノヴゴロドのスロヴェネの長老ゴストムィスルがおかれている。
2. ヴァリャギとルシは別ものである。
3. アスコリドとジルはヴァリャギではなく、キーの子孫であり、キエフのポリャネの土着の公である。
4. イゴリはリュリクの子ではなく、オレグは軍司令官ではなくて公であり、1人でキエフを占領する。

シャフマトフは、1050年集成のなかからさらにノヴゴロド系の伝説をとりのぞくことによって、『キエフ最古集成』（1037年集成）を復元している。それを基礎にして、ノヴゴロド系の伝説がつけ加えられ、さらに複雑に発展していったのである。1037年集成は、つぎのとおりである。

「ルシの国のはじまり。3人の兄弟がいた（以下1050年集成におなじ）。そのころ、スロヴェネとクリヴィチとメリャが男〔1人〕について白リスの毛皮〔1枚〕を貢税としてヴァリャギに納めていた。ところで、そのものたちは彼らのところに来たり、スロヴェネとクリヴィチとメリャに暴力をふるっていた。そしてこれらのヴァリャギのゆえに、ノヴゴロド人はヴァリャギと呼ばれた。ところで、それまではスロヴェネであったのである。そして彼らのところにはオリグという名の公がいた（以下1050年集成とおなじ）。そしてオリグはキエフに公として君臨しつつ座した。そして彼のもとにはヴァリャギの士がおり、そのときから〔彼らは〕ルシと呼ばれた。この

オリグは町々をたてはじめ、ヴァリャギとクリヴィチとメリャに貢税をさだめた」<sup>⑩</sup>。

ここでは、ヴァリャギをまねいた話のはのぞかれている。シャフマトフによれば、キー兄弟のキエフ建設、北部諸種族のヴァリャギへの貢納、ヴァリャギの公オレグによる、ポリャネの公アスコリドの殺害とキエフ占領が、本来のキエフ系の伝説とされているのである。

そこで、つぎの点が問題になってくる。

1. シャフマトフの復元の可否の検討。
2. 記録された伝説の背景の探求。

そのためには、まずキエフ系伝説とノヴゴロド系伝説を個別的に解明したうえで、両者の統合のされかたを検討しなければならない。それは、それぞれに大きな問題であり、とうてい小論の枠におさまるものではないので、ここでは、『ノヴゴロド第1年代記新本』以外の記録にとどめられた伝説の断片を利用することによって、まずノヴゴロド系の伝説の復元と、その背景をさぐることにする。

### 3. ノヴゴロド系伝説の原形

**ゴストムィスル** うえに述べたように、『すぎし年月の物語』をはじめ、『ノヴゴロド第1年代記新本』の本文、あるいは『ウスチュグ年代記』にもでていない、スロヴェネのノヴゴロドの長老ゴストムィスルをリュリクの前に認めることは、重大な問題である。ところで、ゴストムィスルの名が年代記にあらわれるのは、15世紀からであり、それはつぎのようになっている。

『ソフィア・アカデミー年代記』——「スロヴェニはドゥナイから来て、イリメリと呼ばれるモイスクの湖のほとりに住みつき、その名で呼ばれた。そして町をつくり、そこに自分たちの氏族のノヴゴロド人のなかから、ゴストムィスルを長老に、公にすえた」<sup>⑪</sup>。

15世紀初めのこの年代記にはじまって、ゴストムィスルの名は、『ノヴゴロド第4年代記』、『ソフィア第1年代記』、『ニコン年代記』、『トヴェリ年代記』、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』その他、および17世紀にノヴゴロドで書かれた『フロノグラフ』に含まれている『いにしえの諸公の物語』にあらわれている。古い記事を多く残している特異な『ニコン年代記』では、それはつぎのようになっている。

「スロヴェネはドゥナイから来て、イルメリ湖のほとりに住みつき、その名で呼ばれた。そして町をつくり、それをノヴゴロドと呼び、ゴストムィスルを長老にすえた」<sup>⑫</sup>。

なお、『すぎし年月の物語』では、この個所は、「スロヴェニはイルメリ湖のほとりに住みつ

き、その名で呼ばれた。そして町をつくり、それをノヴゴロドと呼んだ」<sup>⑧</sup>となっている。

年代記の本文のほかに、『ノヴゴロド第1年代記新本』の6497（989）年の項におさめられている、ノヴゴロドのボサドニク（市長官）の表では、ゴストムィスルが先頭にかかげられている。「第1ゴストムィスル、コスニャチン、オストロミル…」<sup>⑨</sup>。

シャフマトフは、復元した1050年集成にゴストムィスルをいれ、それが1093年集成と『すぎし年月の物語』において、なんらかの理由で脱落したと考えているが、それにたいして、ソビエトの学者は批判的である。むしろ、『すぎし年月の物語』の形に、あとからゴストムィスルが挿入されたものと考えている。しかし、年代記作者がゴストムィスルの名をのせるについては、当然なんらかの根拠があったはずであり、それをノヴゴロドの民間伝承にもとめることについては、シャフマトフを含めて、研究者の意見は一致している。

たとえば、『ノヴゴロド市長官』（1962年）の著者ヤニンは、『ノヴゴロド第1年代記新本』の市長官表のうち、ゴストムィスルと、年代記に市長官としてはじめてあらわれる11世紀初頭のコスニャチン（2番目）のあいだに150年の空白があり、しかもその間に、年代記の977年の項にヤロボルクがノヴゴロドに市長官を任命した記事があるのにもかかわらず、その名が記されていないために、それが市長官表にもれている事実から、市長官表のゴストムィスルは、のちに挿入されたものであるとしている。そして、この挿入について、ヤニンはつぎのように述べている。15世紀初頭の「A表〔市長官表〕におけるゴストムィスルの記述は、地方の口碑伝承にもとづいており、A表をもとにして『ポリフロン』〔1418年のフォチー集成〕において挿入がおこなわれた」。ヤニンは、この『ポリフロン』から『ノヴゴロド・ソフィア集成』に、さらに15世紀の諸年代記にとりいれられたとしている。<sup>⑩</sup>

年代記研究の権威であるリハチョフも、「ゴストムィスルにかんするのちの年代記の報道は、きわめて古いものでありうる」<sup>⑪</sup>と述べ、また『フォチー集成』について、つぎのように指摘している。「決定的に新しい要素をなしているのは、勇士アリョシャ・ポボヴィチ、アドリヤン・ドブリャンコフ、ジェミヤン・クジュネヴィチ、ログダイ・ウダルイ、ドブルィニヤなどの民衆叙事詩的伝説が、集成に利用されたことである…やはり民間伝説にもとづいて…ノヴゴロドの『長老』ゴストムィスルについての記述が…フォチー集成にとりいれられた」<sup>⑫</sup>。

ゴストムィスルについての記事を含む17世紀の『フロノグラフ』についても、ゴストムィスルについて研究を発表したヴィリンバホフは、つぎのように指摘している。『フロノグラフ』の作者は、年代記以前の時代の事件を書くにあたって、それを創作したのでもなく、外国の史料からおとぎばなし的な記事をただ借用しただけではなくて、われわれには知られていない、なんらか

の年代記の史料か、あるいは民衆の記憶にとどめられた古い伝説を利用したのである」<sup>98</sup>。

以上みてきたように、たとえ1050年集成に存在していたにせよ、あるいはいないにせよ、ゴストムィスルが民間伝承上の人物であることについては、研究者の意見が一致している。ゴストムィスルとは、「氏族」が「氏族」と、町が町と戦っていた時代、つまり土着の公を中心にしたスロヴェネ、クリヴィチなどの種族（というより種族連合）が、たがいに覇権を争っていた時代——国家成立の前段階である英雄時代——の英雄の一人であると考えられる。したがって、ノヴゴロド系の伝説として、リュリクの前に、スラヴの土着の公としてゴストムィスルをおくことは、十分根拠のあることといえる。

**ヴァジム** ヴァジムの名は、『ニコン年代記』にあらわれている。それはつぎのとおりである。

「6372年…その年ノヴゴロド人は、はずかしめられていった。『われわれはまるで奴隷のようだ。リュリクのために、また彼の氏族のために、多くの悪行をいろいろこうむっている』。その年リュリクは勇敢なヴァジムを殺し、彼の相談役であるその他多くのノヴゴロド人を殺した。

6375年…その年リュリクから、ノヴゴロドからキエフへ、多くのノヴゴロドの士がのがれた」<sup>99</sup>。

6372年は、ビザンツの天地開闢暦では5508年をひき、西暦864年にあたり、862年のリュリクのノヴゴロド到着の2年後にあたっている。ルィバコフは、『ニコン年代記』はビザンツ暦ではなくアレクサンドリア暦にしたがっており、6372年は5500年をひいて872年にあたると主張している<sup>100</sup>。この点は年代記の紀年法としてはなほだ複雑な問題をかかえており、その結果によってはヴァリャギとキエフの関係に根本的な解釈の相違を生みだす可能性がふくまれている。ここではこの問題にふれる余裕はないので、『ニコン年代記』でもヴァリャギのノヴゴロド到着が6370年になっていることから、「それから2年後」という点にだけ注目することにする。

つまり、リュリクの到着後2年たって「勇敢なヴァジム」が殺され、さらに3年後に多くのノヴゴロド人がキエフへ亡命したのである。

このヴァジムの実在性について、ヴィリンバホフは、つぎのように述べている。「これ〔上記の記述〕以外に、われわれはどこにも、この歴史上の人物にであわない。このため、かつてはヴァジムの存在にうたがいがもたれていた。それがのちの年代記の記事によってのみ伝えられ、なんらかの補足的な証拠によって裏づけることができない、といったようなことを断言するのは、もちろん困難なことである。しかし、このばあいわれわれには、ヴァジムの伝説（あきらかにノヴゴロド起源のものである）は、民衆の記憶によるか、あるいは今日のこっていない年代記の写本にたもたれていた昔の実在の事件のなんらかの反映にもとづいている、と想定する根拠があるように思われる」<sup>101</sup>。

はなはだひかえ目な発言であるが、あとで述べるように、タチシチェフもヴァジム伝説を採用しているので、ヴァジムをリュリク以後の人物として、ノヴゴロド系の伝説に加えることにする。

**ラドガ** いままでみてきたところでは、ことごとく、リュリクは海のかなたからノヴゴロドに到着したことになる。しかし、これについては『すぎし年月の物語』の第3編集（1118年）の『イパチー本』に異文がでている。

「3人の兄弟が自分の氏族とともに選びだされ、はじめてスロヴェネのところに到着し、ラドガの町をたて、長兄はラドガに住みリュリクであり、つぎのシネウスはペロオゼロに、3番目のトルヴォルはイズボリスクに住んだ。そしてこのヴァリャギのゆえにルシの国と呼ばれた。2年ののちシネウスが死に、その弟トルヴォルも〔死んだ〕。そしてリュリクは全権力を一人でぎり、イリメリに到着し、ヴォルホフのほとりに町をたて、それをノヴゴロドと名づけた。そしてそこに公として君臨しつつ座し、自分の土に国をわけあたえ、町々をたてた」<sup>9</sup>。

ラドガは、フィンランド湾からネヴァ河を通してネヴォ（ラドガ）湖にで、そこにそそぎこむヴォルホフ河をすこしさかのぼったところに位置している（ネヴァの河口から東へ水路150キロ）。そこからさらに180キロ南へさかのぼると、ノヴゴロドに到着する。また、ラドガの近くで湖にそそぎこむシャシ河をさかのぼるとヴォルガ上流に達し、それが9世紀の東方貿易の通商路になっていた。チホミロフが指摘するように、「要塞内のゲオルギー教会の近くで発見された8—9世紀のアラブの貨幣は、ラドガの居住地の古さをものがたっている」<sup>10</sup>。しかも、「スカンジナヴィアの東方貿易のもっとも古い段階では、うたがいもなくラドガは、ノヴゴロドよりも都合のいい中心地であった」<sup>11</sup>。

したがって、東方貿易とビザンツ貿易に従事するためにスラヴの地に侵入してきたヴァリャギが、ノヴゴロドよりもさきに、まずラドガを占領して、それを拠点としたことは、当然のことといえる。

この点、チホミロフはラヴドニカスの言葉をひいて、つぎのように指摘している。「最古のラドガの住民は、うたがいもなくスラヴ人に属していたとはいえ、ラドガに近いプラクン地方の古墳は、その構造と埋葬様式の点で、『ラドガ近郊の火葬をともなった、ふつうの、同時代の古墳とことになっており、当時のスウェーデンの古墳に、たとえばビルキ市付近の古墳にきわめて似ている（まったく一致しているとさえいえる）』」<sup>12</sup>。

ラドガがヴァリャギの拠点であったことは、スカンジナヴィアのサガからもうかがえるが、1188年に編集された『イパチー本』のほかに、ロシアの資料にもあらわれている。『イパチー本』を

も含めて、『すぎし年月の物語』では、ノヴゴロドからキエフにくだってきて、第1代のキエフ大公に即位したヴァリャギのオレグは、ヘビにかまれて死に、その墓はキエフのシチェコヴィツァ山にあることになっている。ところが、『ノヴゴロド第1年代記新本』（1093年集成）では、その個所がつぎのようにになっている（『ウスチュグ年代記』も、基本的にはおなじ）。

「〔ギリシヤ遠征からキエフにひきあげたのち〕オレグはノヴゴロドへおもむき、そこからラドガへ〔むかった〕。他のものは、彼が海のかなたへおもむいたとき、ヘビが足をかみ、そのために死んだといっている。彼の墓はラドガにある」。<sup>⑧</sup>

このようにみえてくると、リュリクはノヴゴロドにではなくラドガに到着したとする『イパチー本』の異文の方が、現実性が強くなってくる。これはノヴゴロド系ではなく、ラドガ系の伝説ではあるが、ヴァリャギにかんする非キエフ系の北部の伝説として、広い意味でのノヴゴロド系伝説に加えることにする。

ただし、リュリクがノヴゴロドの町をたてたとする『イパチー本』の記事の後半の部分は、一般に否定されている。チホミロフはノヴゴロドについて、つぎのように述べている。「ノヴゴロドの歴史のはじまりは、キエフの歴史とおなじものと考えられる。はじめノヴゴロドの場所には、種族の中心地の一つとして小さな町があった。のちに公の一人の城塞都市が発生した」<sup>⑨</sup>。「いづれにしても、ノヴゴロドは、すでに9世紀には存在していた最古の都市の一つである」<sup>⑩</sup>。さらに彼はヴァリャギとの関係において、つぎのように指摘している。「ヴォルホフの早瀬は、地方の船頭があやつる商船にとっては、通りにくい障害になっていたが、それとともに、ノヴゴロドにたいする海賊の不意の攻撃、とくにスウェーデンの封建領主の攻撃の可能性を困難にしていた。ところで彼らは、フィンランドの岸にはたびたびおとずれてきたが、ラドガ以遠のノヴゴロドの領域にはけっして進むことができなかった」。<sup>⑪</sup> チホミロフによれば、リュリクがイリメリ湖のほとりにたてたのは、ノヴゴロドではなく、郊外のリュリコヴォ・ゴロジシチェであった<sup>⑫</sup>。

#### 4. タチシチェフの復元

ゴストムィスル、ラドガ、ヴァジム—この3つの伝説の存在を認めて、年代記の復元に利用したのは、タチシチェフである。彼は1739年にはすでに書かれていたと推定されている『ロシア史・第2部・ネスルトの年代記』のなかで、今日では失われている写本をも含めて、多くの写本をつきあわせたうえで、つぎのように『すぎの年月の物語』を書きあらためている。

「6369（861）年。海のかなたからヴァリャギが貢税をとるために、スロヴェネのヴェリキー



・グラドに來た。ところでスラヴャネとルシはそれをこばみ、彼らに貢税を納めなかった。そのときスロヴェネの公ゴストムィスルが後継ぎをのこさずに死んだ。そして人びとは、みずから治めはじめた。しかし、彼らには正義がなかった。氏族は氏族にむかって立ちあがり、内紛があり、たがいに戦い、たがいに敵以上に荒しあつた。国の長老たちがこれを見て、スロヴェネ、ルシ、チュジ、クリヴィチおよびその他の地から集まり、ルシの国は大きくて豊かであるが、公がないので秩序と正義がない。そのために、すべてを支配し、治めるような公を選ばなければならない、と考えた。そして、意見をまとめ、ゴストムィスルの遺言にしたがつて、ルシと呼ばれるヴァリャギから公を選んだ。ヴァリャギはスヴィア（シヴェディ）、ウルマニ、イングリャネ、グティ（ゴティ）のように、いろいろな呼び名をもっている。ところでこのヴァリャギはとくにルスィ（これはフィニである）と呼ばれている。

6370（862）年。長老たちは、このようにきめて、海のかなたのヴァリャギ・ルシのもとへ、公をもとめて使者を送った。そして使者はおもむいて、公として君臨しにくるようにリュリク公と彼の2人の兄弟を諸公にねがった。

リュリクは兄弟と自分の一家とともに、集まり、ルシをひきつれて、スロヴェネのところにはじめて到着し、スタルイ・ラドガの町をたてた。そして長兄のリュリクはラドガに住み、つぎのシネウスはわれわれのペロオゼロに住み、3番目のトルヴォルはイズボルスクに〔住んだ〕。そしてこのヴァリャギのゆえに、この国はルシと呼ばれた。それはのちにノヴゴロドの国と呼ばれた。以前は彼らの氏族の公がいたのであるが、いまではヴァリャギの氏族からでたものが治めている…

6372（864）年。シネウスとその弟のトルヴォルが死に、リュリクが1人で全権力をにぎった。ところで彼はラドガからイリメニ湖にうつり、ヴォルホフのほとりにノヴゴロドをたて、そこに滞在し、自分の有力な家臣に地方をわけあたえた…

6377（869）年…この年スロヴェネがノヴゴロドから、リュリクからキエフにのがれた。というのは、ヴァリャギの奴隸であることを欲しなかったスロヴェネの勇敢な公ヴォジムが殺されたからである」<sup>86</sup>。

タチシチェフの復元では、ルシやノヴゴロドの取りあつかいに無理がみられるが、18世紀前半の研究水準で、ゴストムィスル、ラドガ、ヴォジムを、ヴァリャギ招致伝説にとりいれたのは、卓見といわなければならない。

ところで、ヴァリャギ招致伝説に以上の諸要素をからみあわせても、それはやはり伝説の原形の復元であって、史実そのものを意味するものではない。史実は伝説化するにあたって、それが

民衆によるものであれ、支配者側によるものであれ、語り手の意識をくぐりぬけるさいに変形をこうむる（第1次変形）。それがさらに記録されるときに、もう一度変形をこうむる（第2次変形）。記録者は当然支配階級に属しており、政治的な配慮がそこに加わるからである。しかし、それはまだ地方的な政治の段階にとどまっている（もっとも、記録されないままに、地方的・政治的伝説として語りつがれるばあいもある）。地方の統一が進み、政治的・軍事的統一国家が成立すると、地方の伝説は集められて中央の伝説に吸収され、くみこまれ、国家的見地から筋を通して編集される。そのさい伝説はさらに変形をとげて、「政治的・宗教的歴史書」として定着する（第3次変形）（この過程は、出雲神話が高天原神話に統一的に吸収され、天孫降臨物語となって再構成されるさいに、典型的にみられる）。

ヴァリャギ招致伝説の成立と変形の過程を明らかにするうえで、つぎにしなければならないのは、ゴストムィスル、ラドガ、ヴァジムの伝説に反映されている背景を推測し、史実を再現することである。

## 5. 伝説の背景

9世紀の東ヨーロッパの北部では、スロヴェネ、クリヴィチ（スラヴ族）、チュジ、メリヤ（フィン族）などの各種族連合（土着の公国）が形成され、それぞれ土着の公（王＝豪族）を中心にして勢力を争っていた。これら公国のうち、イリメニ湖のほとりのノヴゴロドを中心にして形成されたのがスロヴェネであり、その公がゴストムィスルの名で代表される一門であった。そこへ、バルト海のかなたからヴァリャギが、ヴォルガを通じる東方貿易とドネプルを通じるビザンツ貿易をもとめて、スラヴやフィン土地へ侵入してきた。彼らはフィンランド湾の海岸に上陸したであろうが、さらにネヴァ河をさかのぼり、ラドガ湖からボルホフ河をすこしさかのぼって、通商の起点であるラドガを占領し、スラヴやフィンに貢税を課し、乱暴をはたらいた。

そこでスラヴやフィンが協力してヴァリャギを打ちやぶった（「海のかなたへ追いはらい」というのは、文字どおり、バルト海のかなたへ追いかえた、ととらなくてもいいであろう）。危険がさると、ふたたび公国のあいだで争いがはじまった。このような情勢のなかで、ノヴゴロドの公ゴストムィスルは、ラドガのリュリクに使いを送り援助をもとめた（このばあいの「海のかなたのヴァリャギのもとへおもむいた」というのも、文字どおりにとる必要はない）。同一民族内の争いに勝ちぬくために異民族の軍事力を利用することは、当時としてはめずらしい現象ではなかった。リュリクとは、ラドガに侵入してきた一団のヴァリャギの隊長であり、ゴストムィスルに

まねかれた傭兵隊長であったのであろう。おそらく彼には、あとから襲来してくるヴァリャギの撃退も依頼されたことであろう。なお、リュリクの弟シネウスとトルヴォルであるが、3人兄弟をまねく伝説は当時広くおこなわれていた型であり、3人にこだわる必要はなく、ここではリュリク1人と考えればよい。

まねかれたリュリクはボルホフ河をさかのぼってイリメニ湖のほとりに砦（リュリコヴォ・ゴロジシチェ）をきずいた。だが、軍事力をにぎる傭兵隊長は、やがてクーデターをくわだて、ノヴゴロドの公権力をその手におさめた。ゴストムィスルはそのさい殺されたのかもしれない。

権力をにぎったリュリクの統治は、けっして「法にしたがってさばく」ような公正なものではなかった。力による異民族の支配はきびしいものであり、ノヴゴロドの人びとは、「われわれはまるで奴隷のようだ」となげいた。だが、彼らはいたずらになげいているだけではなかった。2年後にヴァジム（ゴストムィスルの一族であろう）を中心に結束し、反乱をおこした。彼らは「勇敢に」たたかったが、敗れて主謀者のヴァジムと彼の相談役たちが殺された。しかし、抵抗運動はそれでやんだわけではなく、3年後にふたたび反乱をおこしたのであろう。弾圧をうけて、ノヴゴロドの士が多くキエフへのがれている。

やがてリュリクの権力は安定し、彼につづくオレグの時代にかけて北部地方を統一し、オレグは南へくだってキエフを占領することによって、キエフを中心にして南北のスラヴを統一し、古ルシ国を成立させたのである。時に882年といわれている。

以上は、あくまでも推測の域をでないものである。とくに、オレグについては、伝説を分析したうえでなければ、結論をだすことができない。だが、ヴァリャギ招致伝説にかんしては、すでにクリュチェフスキーが、傭兵隊長リュリクについて、「自分の力を自覚した雇人は、主権者に転化した」<sup>※</sup>と推測している。ソビエトの研究者もこの説を支持しており、とくにマヴロジン<sup>※</sup>とルイバコフ<sup>※</sup>は、ゴストムィスル、ラドガ、ヴァジムの組み合わせを積極的に主張している。

そこでつぎには、おもに文献によって推測された以上の史実を考古学その他の資料によって、さらにくわしく裏づけること、史実が伝説化され、記録されていく過程で変形をこうむっていった様相をさぐること、および、ノヴゴロド系伝説を吸収したキエフ系伝説と、その背景を推測し、キエフ、ノヴゴロド両系の伝説が統一される様相をあきらかにすることが、のこされた課題になってくる。

(1965. 10. 7)

註

- ① 木崎良平 『原初年代記考』,第2篇,その1(『鹿児島大学・史学科報告』,第13号,1964年,51(5)ページ)。
- ② 同上, 62(6)ページ。
- ③ 木崎良平 「『ルースカヤ・ゼムリャー』という言葉についての覚え書」(『鹿大史学』,第4号,1956年,42ページ)。
- ④ 同上, 43ページ。
- ⑤ 家永三郎 『日本文化史』,岩波書店,1959年,33～34ページ。
- ⑥ 同上, 36～37ページ。
- ⑦ 同上, 31～32ページ。
- ⑧ 肥後和男 『神話時代』,至文堂,1959年,15～16ページ。
- ⑨ 三品彰英 『日本神話論』(岩波講座『日本歴史』23,別巻2,岩波書店,1964年,302ページ)。
- ⑩ 拙稿『「ウスチューグ年代記」考』(『古代ロシア研究』,第5号,1964年)。同「すぎし年月の物語」の成立(研究史概観)』(『大阪外国語大学学報』,第15号,1965年)参照。
- ⑪ 井上光貞 『日本の歴史』1,中央公論社,1965年,3ページ。
- ⑫ 拙稿『「すぎし年月の物語」の成立(研究史概観)』(『大阪外国語大学学報』,第15号,1965年)参照。
- ⑬ А.А. Шавматов. «Разыскания о древнейших русских летописных сводах», 1908, стр.
- ⑭ 同上
- ⑮ «Софийская академическая летопись», 1796, стр.2 [«Вестник Ленинградского университета», 1963, №14, стр.32] .
- ⑯ «Никоновская летопись» ПСРЛ т.9, 1862, стр.3.
- ⑰ «Повесть временных лет», ч.1, 1950, стр.11.
- ⑱ «Новгородская первая летопись старшего и младшего извода», 1950, стр.164.
- ⑲ В.Л. Янин «Новгородские посадники». 1962, стр. 46—47.
- ⑳ 註 ⑰ Ч2, стр.214
- ㉑ Д.С.Лихачев «Русские летописи и их культурно-историческое значение», 1947, стр. 306.
- ㉒ В.Б.Вилинбахов «Несколько замечаний о легендах великого Новгорода и древнейших межславянских связях» («Вестник Ленинградского университета», 1963, №14, стр.36).
- ㉓ 註⑯の9ページ。
- ㉔ Б.А. Рыбаков «Предпосылки образования древнерусского государства» («Очерки истории СССР, III—IX вв.» 1958. стр. 803—804, 815).
- ㉕ 註㉔の42ページ。
- ㉖ «Ипатьевская летопись», ПСРЛ т.2,1908, стр. 14.
- ㉗ М.Н. Тихомиров «Древнерусские города» 1956, стр.385.
- ㉘ 同上, 384 ページ。
- ㉙ 同上
- ㉚ 註⑯の109ページ。
- ㉛ 註㉗の44ページ。
- ㉜ 同上, 377ページ。
- ㉝ 同上, 375ページ。
- ㉞ 同上, 22ページ。
- ㉟ В.Н. Татищев «История российской», т.2,1963, стр. 32—34.
- ㊱ В.О. Ключевский «Курс русской истории» ч. I («Сочинения», т. 1, 1956, стр. 141.)

③⑦ В.В. Мавродин «Образование дравнерусского государства», 1945, стр. 211—212.

③⑧ 註②の829—831ページ。

はじめ、この第1節と第2節のあいだに、さらに1節をもうけ、「国づくりと国ゆずり」と題して、出雲神話が高天原神話に吸収されていく過程をのべる予定であった。紙数の関係で省略し、その要旨だけを第4節の最末尾にまとめた。ヨーロッパ史（西ヨーロッパだけではなく、東ヨーロッパをも含めたヨーロッパの歴史）と日本史の比較研究のうえから興味あるテーマをなしているので、省略した部分を稿を改めて発表することにする。